

# カムパネルラ

～カムパネルラとは～  
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.14 2010年1月号

- さかだちのできるわにが見たものは・・・？ ・ ・ ・ ・ ・ 木下 英俊
- なわとびをする ・ ・ ・ ・ ・ 藤田 博
- 「さかなはさかな」何とも重みのある言葉です ・ ・ ・ ・ ・ 鶴殿 義雅
- 生きる悲しみを教えてくれるこの一冊 ・ ・ ・ ・ ・ 柴崎 満理奈
- 新刊紹介 ・ ・ ・ ・ ・ 藤田 博

## さかだちのできるわにが見たものは・・・？

木下 英俊

わにのコーネリアスは、生まれる時、卵から立って出てきました。大きくなった彼は、立ったまま、「ぼくには くさむらの ずっと むこうが みえる！」、「うえから さかなが みえるよ！」と、他のわにには見えない景色を教えてやります。でも他のわにには、「それが どうしたっていうのさ？」「へえ それで？」と、あまりいい気はしないようでした。コーネリアスは、怒って川岸から出ていってしまいます。そこで彼は猿に出会います。猿は、「ぼくは さ



かだちが できる」と言って、逆立ちをやってみせたり、しっぽで木にぶら下がってみせたりしました。驚いたコーネリアスは、「それ おしえてくれる？」とお願いします。猿はコーネリアスの練習を嬉しそうに助けてやります。逆立ちと、しっぽでぶら下がるのをおぼえたコーネリアスは、胸を張ってもとの川岸に歩いて帰ります。そして他のわにの前で、逆立ちやしっぽでぶら下がるのを自慢そうにやってみせたのですが、彼らはやはり顔をしかめて、「へえ それで！」しか言ってくれません。がっかりしたコーネリアスは、猿のところへ戻ろうと考えたのです。しかし、ふとふりかえると、他のわにたちが逆立ちやしっぽでぶら下がる練習をしていました。コーネリアスは微笑み、「かわぎしでの くらしは これで すっかり かわるだろう。」と言うのです。

立って歩くだけでも変わっているのに、コーネリアスは、さらに逆立ちやしっぽでぶら下がるのを覚えようとします。私も小さい頃からずっと逆立ちをしたり、鉄棒にぶら下がったりするのが大好きだったので、こんなコーネリアスにとっても親近感を覚えます。

這った姿勢と、立った姿勢での目線は明らかに違い、別世界のような違った景色が見えます。逆立ちをしたり、ぶら下がったりして見える景色も普段とは違ったものです。その景色の不思議さや魅力は、実際に逆立ちやぶら下がりをやってみなければわからないことです。コーネリアスが最後に微笑んだのは、そんな景色の見える新しい世界に、他のわにが足を踏み入れようとしているのを嬉しく思ったからかもしれないのです。

この絵本を初めて手にしたのは、長男が幼児だった15年くらい前のことですが、今回あらためてのぞいてみて、コーネリアスが逆立ちをしたり、ぶら下がったりするのを助ける猿の姿が印象に残りました。「いっしょうけんめい れんしゅうして、ちょっとたすけて もらえば できるさ」と声をかける場面、「コーネリアスは さるの げいとうを いっしょうけんめい れんしゅうし、さるは かれを たすけてやるのが うれしそうだった。」などの場面が微笑ましく感じられます。私もこんな雰囲気、器械運動の授業ができればいいなと思いました。

「コーネリアス たってあるいたわにのはなし」レオ・レオニ作・絵／谷川俊太郎訳／好学社

(保健体育講座)

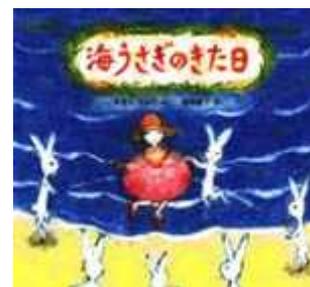
上がっては下りるなわとびのなわ、一本のなわが輪の形に空間を切り取ります。「花環が圓を描くとそのなかに富士がはいる。その度に富士は近づき。とくに坐る。」草野心平がその輪に入る富士山を詠ったのは、輪の中につくられる別の世界を意識したからに違いありません。



山の雪が解け、春の風が吹き始めます。冬の間、眠っていた母グマと子グマが目覚めます。その子グマの耳に、子どもたちが歌う「くまさん くまさん」のなわとび唄が聞こえてくるのです。小野かおる作『くまさん くまさん おはんなさい』(福音館書店)の始まりです。誘われるようにクマは山を駆け下りていきます。「ぼくも いーれーて。」なわとびのなわに子グマが入ることができるのは、なわとびが水平の世界をつくり出し、出会いの空間をつくり出しているからです。それが時間の経つのを忘れてしまう遊びの世界と一つなのは言うまでもあり

ません。「あっ おかあさんの こえだ。ぼく かえらなくちゃ。」子グマが子どもたちとなわとびをした、子どもたちが子グマとなわとびをした、それは夢だったのでしょうか。「くまさん くまさん おはんなさい」、そう口ずさみながら子グマは眠っています。とすれば、すべては眠る子グマの見た夢だったのかもしれないのです。

あまんきみこ文・南塚直子絵『海うさぎのきた日』(小峰書店)の「わたし」は、なわとびのできない女の子です。「おおなみ、こなみ ぐるっとまわって ねーこの目」、弟はうまくそれに合わせ、「くるくるまわるひもの中で、ぴかぴかわらいながら、うさぎみたいにとんでいる」のです。繰り返される「おおなみ、こなみ」の唄に誘われるように、海を見たくなった「わたし」は、深呼吸を三回して、坂道を下りていきます。砂浜でなわとびをしているうさぎが目に入ります。「ぼくたち、見えますか?」「ぼくたちの声もきこえますか?」うさぎの姿が見えるのは、うさぎの声が聞こえるのは、「わたし」が向こう側の世界に入ったからに違いありません。一匹だけ、元気のないうさぎがいます。なわとびのできないそのうさぎと自分が重なります。そのとき誰かが「わたし」の手をにぎってくれます。なわとびのできない「わたし」は、なわとびのできないうさぎに促されるようにして輪に入るのです。回る輪の中に入るそこでは、輪であること、円いということが重要です。その円い輪の中でのことのすべてが、とべない「わたし」、とびたい「わたし」の見た夢なのかもしれません。



エリナー・ファージョン文・シャーロット・ヴォーク絵『エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする』(岩波書店)は、「生まれながらのなわとび上手」エルシー・ピドックの物語です。エルシーの評判はどの村にも届きます。ケーバーン山の妖精さえ、その名を聞きつけたほどです。「ひと月に一度、三日月の晩、ケーバーン山にくるがよい。」妖精のアンディ・スパンディは、エルシーに新しいとび方を教えます。ケーバーン山で行われたなわとび競争で、エルシーは眠ったままにとびます。「高とび、するりとび、二度ぐるりぐるりとび 早とび おさめとび おそとび 爪先とび 長とび 強とび 軽とび」、妖精たちが疲れ果てとべなくなっても、エルシーはとびつづけるのです。つなが短くなってしまったエルシーは、長いつなを使ってとぶようになります。三日月の晩、ケーバーン山で村人全員がなわとびをしたことが思い出話に、思い出話が昔話に、昔話が伝説へと変わっていきます。いつから



そうなったのか、どうして三日月の晩なのかわからなくなっていくのです。ある日、領主がケーバーン山を出入り禁止にします。それに対抗してエルシーが、村のなわとび上手エレンを介して出した条件は、「これまでに、そこでなわとびをしたかぎりのものは、ひとり残らず、もう一度、三日月の晩、順番になわとびをさせるように。」というものでした。最後に109才のエルシーその人が登場します。「小さい老女」が手にしているのは、伝説となったあの短いつなです。「あのひと、眠ってとんでる!」とびつづけるエルシーが領主の思惑を打ち砕きます。すべては、眠りながらなわとびをするエルシーの見た夢だったのでしょうか。それとも、こうあればいいとの思いを抱いて、人々が見た夢だったのでしょうか。エルシーは伝説の中、いまもとんでいる、とびつづけているのです。

「くまさん くまさん おはんなさい」小野かおる作/福音館書店

「海うさぎのきた日」あまんきみこ文・南塚直子絵/小峰書店

「エルシー・ピドック、ゆめでなわとびをする」エリナー・ファージョン作・  
シャーロット・ヴォーク絵・石井桃子訳/岩波書店

## 「さかなはさかな」、何とも重みのある言葉です

鵜殿 義雅

レオ・レオニ。その名前を聞いて思い浮かべるのは、あの『スイミー』の作者だということでしょう。一人ぼっちになったスイミーが大海原を冒険、新たな仲間たちと出会い、勇気と知恵を振り絞って大きな魚を追い払う物語は、小学校2年生の国語の教科書に採用されています。学芸会2年生の劇として定番となっていることもうなずけます。



ここで紹介するのは、そのレオ・レオニ作の『さかなはさかな』です。同じ作者で、主人公も小魚。この物語も、ファンタジーあふれる海の中の世界で、小魚が痛快な冒険活劇を繰り広げる...、そんな予想をしてしまいます。でも、そこはちょっとだけ違うのです。

森の外れの池に住んでいる「こざかな」(「スイミー」のような名前はありませぬ)は、おたまじゃくしとお友達。いつも二人で仲良く遊び、語り合っていました。でも、やがておたまじゃくしには足が生え、かえるとなって外の世界(陸地)に旅立って行きます。この物語でも、一人ぼっちになってしまうこざかな。ですが、こざかなの冒険はすぐには始まりませぬ。こざかなは、寂しさを感じながら日々を過ごしたのち、やがて体も立派な「さかな」へと成長していきます。そんなある日、かえるが池の中へ里帰り。そして外の世界で見てきたことをたくさん話してくれるのです。

カラフルな羽で大空を飛びまわる鳥、まだら模様で角が生えた牛、きれいに着飾った男や女の別がある人間。ずっと池の中で過ごしてきたさかなには、どれも簡単には想像がつかませぬ。あれやこれやと思いをめぐらせた姿は、本の中の絵として登場します。レオニが描いたさかなの想像の世界を、皆さんにも是非見てもらいたいと思います。単に面白いだけのものとは違います。私たち人間には、科学によって知り得たことは増えましたが、想像の世界は無限に広がっています。見たことがないものを想像する時の心は美しい。それを単に面白おかしいものとして笑うのはいかがなものでしょうか。それぞれの人が想像をめぐらせ、自由に思いをはせ、その想像や思いを語り合うのは素晴らしいことです。

さかなの好奇心はもう止めることができません。「かえるが見た世界を、自分の目で確かめたい!!!」。ついには、思い切って岸へ飛び上がるのです。レオニの得意とする大胆な展開に期待しつつも、この先どうなるのかという不安。私は大人になってからこの本を読みましたが、手に汗握って次のページを開きました。しかし、結局のところ、『スイミー』のようなハッピーエンドではありませんでした。

「さかなはさかな」

その後、池に戻ることができたさかなに投げかけた、かえるの言葉です。さかなの悲哀を嘆きつつも、さかなの世界(水中)の素晴らしさを教えてくれたのです。

違う世界に対する憧れ、背伸びしてみたいと思う気持ち。子どもなら誰しもがもっている気持ちです。教師として、子どもたちのチャレンジを応援したい。「分をわきまえろ」などとは言いません。最後に、かえるのように言いたいです。

「あなたが今いるこの場所も、なかなか捨てたものじゃないよ。いいところだよ。」と。

「さかなはさかな かえるのまねしたさかなのはなし」

レオ・レオニ作・絵／谷川俊太郎訳／好学社

(附属特別支援学校教諭)

## 生きる悲しみを教えてくれるこの一冊

北川幸比古・大倉雅恵編／新美南吉『でんでんむしのかなしみ：いのちのかなしみ・詩童話集』（日本短波放送）

柴崎 満理奈

ある日、でんでんむしは自分が背負っている悲しみに気がきます。「わたしは いままで うっかりして いたけれど、わたしの せなかの からの なかには、かなしみがいっぱい つまって いるではないか。」

でんでんむしは友達に悲しみを打ち明けます。「わたしは なんと という、ふしあわせな ものでしょうか。わたしのせなかの からの なかには かなしみが いっぱい つまって いるのです。」

すると、友達は言いました。「あなたばかりでは ありません。わたしの せなかにも、かなしみは いっぱいです。」

それなら仕方がない、とでんでんむしは、別の友達に会いに行きます。ですが、どの友達を訪ねても皆、同じことを言うのでした。

でんでんむしはようやく気がきました。「かなしみは だれでも もって いるのだ。わたしばかりではないのだ。わたしは わたしの かなしみを こらえて いかなきゃ ならない。」

でんでんむしのように、「殻」に詰った悲しみは外からは見えないものです。誰かが量ることもできません。だからこそ、人は、どうして「私だけ」がと自分の不幸を嘆くのです。しかし、誰もが悲しみを持ち、悲しみを背負って生きているのです。それを知ったでんでんむしは、悲しみに堪えて生きる決意をします。

この物語を読んだ時、生きる悲しみと同時に「強さ」を感じました。生きることは楽しくもあれば、辛くもあります。自分だけが辛いと、殻に籠ってしまいたくなる時もあるに違いありません。ですが、その悲しみを受け入れる「強さ」がなければ生きてはいけません。

「生きる」とは何か。この本を手取る度に、私はでんでんむしと自分を重ね合わせ、その答えを探すのです。

（特別支援教育教員養成課程発達障害教育コース3年）

表紙については、出版社の許可が下りなかったため掲載しておりません。

## 新刊紹介

ノラ・スロイエギン・文／ピルッコ・リーサ・スロイエギン・絵／みむらみちこ訳

『ちびフクロウのぼうけん』（福音館書店）

朝の光が射してきました。お母さんフクロウが子どもたちに声をかけます。「みんな あさですよ。ねるじかんですよ。」夜が活動する時間帯のフクロウにとって、朝は眠りにつく時間なのです。未っ子のちびフクロウは好奇心旺盛、少しも眠くありません。雪の上で何かが動くのを目にすると、「あのぴょんぴょんと あそんでくるよ、そう言って「ゆうきを だして ぴょんぴょんに ちかづいていきました。」ちびフクロウは、「ぼくも ウサギさんみたいに、ぴょんと とびたいな」と思います。とぶことのできるそのウサギは柳の木の芽を食べるのです。「おれみたいに とびはねたかったら、それを たべなくちゃなよ、ウサギからそう言われてしまいます。」



次に出会ったのはクマです。「これに のぼって あそぼよ、ちびフクロウはどきどきしながらクマの足に登ろうとします。「とうみんからめが さめたばかりで、はらぺこよ、機嫌が悪いクマはちびフクロウなど相手にしてくれません。「あのクマさん、ぜったいに あそんであげないから」と強がりを行います。」

次は「ちゃいろの ふわふわしたものよ、リスです。「ふわふわさん」と声をかけるものの、返ってきたのは、「あんたって、あたしと ちがう。しっぽが ないもん。」ちびフクロウは尻尾が欲しいと思っても、松ぼっくりの種のごはんは食べたくないのです。悲しくなったちびフクロウは、月が昇るのをぼんやりと見つめています。夜の時間、フクロウの時間がやってきたのを知らないのです。

「ウサギさんみたいに ぴょんって とべないし、クマさんみたいな おおきな あしもないし、リスさんみたいなふわふわしっぽも ないよよ、そう言うちびフクロウに、お母さんフクロウは、「おやおや、おまえには なにがあるとおもう?」「フクロウにはね、つばさが あるのよ。」「わたしたちは、そらを とべるわ。」ウサギとも違う、クマともリスとも違うことを教えてくれるのです。「はじめて きのおえだを はなれ、じめんに おりよ、冒険をしたことによって、ちびフクロウの中に「ぼくも とびたい!」の思いが形をとるのです。」

日は森の後ろに隠れました。フクロウは眠って夢を見ます。その夢は空を飛んでいるところに違いありません。もしかしたら、ウサギに会ったのも、クマやリスに会ったのも、夢の中でのことだったかもしれないのです。そうだとすると、巣立ちのその日まではあとほんのわずか、春はそこまで来ているからです。

（藤田 博）

発行：宮城教育大学附属図書館